
sweet • brown

tears

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sweet・brown

【Nコード】

N4043Q

【作者名】

tears

【あらすじ】

いつだって俺たちの日常は甘く切なく

けど

刺激に満ちていた

だからこそ

続いてほしい

そう

いつまでも

美形生徒会長×平凡腐男子君

王道？いえ、かなりの邪道です

【1】

どうも、俺は結城^{ゆづき} 和哉^{かずや}街で……いや、全国的に有名な北陽中学に在学中です。

俺の容姿は平凡、ついでに学力は中の上（ここじゃあ平均だけど）運動は全然駄目な平凡中学生…

この北陽中学は学力が偏差値が他の中学よりずば抜けて高く、この北陽中学の制服を纏うだけで周りの大人からは有望視される…

まあ……これといった特徴はないけど、あえて言うなら腐男子ってこと、俺の幼馴染のせいで腐の道に足をつっ込んでしまった…一応、ノンケ……だった…アイツと会おうまでは

平凡な俺と非凡なアイツは月と太陽みたいにかき離れた存在だった…綺麗でどことなく切なげで……そんなアイツのそばにいて幸せだった

.....

初めまして、私は季島^{キジマ} 遥男子校^{ハルカ}……………森宮中の2年生です……………
……………めんどくさがり屋の袒押しつけられてに生徒会長になってしま
った……………まあ、そうなるだろうと思ってはいたが、はあ……………
……………そういえば今日でしたか？従兄弟の子が泊りに来るのは？前に
会った時は175？になっていたからさらに高くなっているかな？
楽しみです

【2】

俺は広い一軒家のインターホンを緊張した手で押した……………
……………この家に来るのは馴れない

「久しぶりですね…和哉くん、ご両親が急に出張になって大変ですね」

綺麗な茶色の髪に色素の薄い瞳と整った顔…

「遥さん…お世話になります」

俺の両親は出張で海外に行ってしまったので遥さんの家にお世話になることになりました。

「カズ坊…でかくなっ たな」

「洋さんもお世話になります」

洋さんは遙さんの兄

「…さあ和哉くん、上がってください」

「そうだぞ、カズ坊、遙に気を使う必要はないぞ」

「兄さんは私以外にも気を使わないでしょ」

「うるせー」

仲いいなー俺も兄弟ほしいな…

「和哉くん…部屋に案内しますね」

「はい」

俺は大人しく遙さんのあとに続いた。

「……です」

……ひろッ

「……?」

「はい」

簡易キッチンにユニットバスにトイレまで……

「いえ……」

「荷物の整理を手伝いますね」

「はい」

俺は綺麗な笑みを浮べる遥さんに思わず目を奪われた。

.....

和哉君はさっきからあたりをキョロキョロしている...どうしたのだろ...

「なんだろ.....これは.....」

BL？

「あーそれはですね」

なるほど……………

「これはこれは」

なんか、弟の部屋でエロ本を見つけた気分ですね…

「和哉君がこないかがわしい物を……………」

「それは……………」

泣きそうになつた和哉君を見て不覚にもときめいた私がいた

「……………」
「冗談ですよ」

「……………」
「え？」

「少しからかっただけですよ、それに純粹にその人を愛しているなら誰かが口出しする資格はないですよ」

「……」

和哉君は何故か黙ってしまった。

「どうかしましたか？」

「いえ………同じことを友達にも言われたから」

「そうですか」

ぐうぐう

「クスッ…ではご飯にしますか」

「はいはい」

頬を染める和哉君を見た私は自分の気持ちに気づいてしまった。

【3】

「ん」

朝の日差しがカーテンの隙間からわずかに零れていた。

「うん？」

見慣れない部屋に違和感を感じつつ起き上がりリビングに向かった。

「おはようございます…和哉君」

「おはようございます…遙さん、洋さん」

リビングに降りると朝食を作ってる遙さんにテーブルで新聞、片手に紅茶を飲んでる洋さんに挨拶した。

「おはよ…お前らは朝から堅苦しい、これからは家族同様なるんだから敬語は禁止」

洋さんは眉間に皺を寄せて言ってきた。

「えゝでも……」

「へ・ん・じ・は？」

「はい……」

「まあ……兄さんの言うことも一理ありますね……和哉、ご飯ができましたよ、座ってください」

どうやら朝食は和食で手が込んでいる……朝からひとりでこれだけのご飯を作るとなると相当の苦労があると思う、少し罪悪感で食べづらい……晩御飯からは手伝おう

「どうかしましたか？和哉君……」

「いえ……少し考え事をしてました……」

「私にできることがあれば言うてくださいね」

「はい……」

「そろそろ行かないと遅れるぞ？」

いつも間にかスーツに着替えた洋さんは食器を流しに置いて職場に向かった。

「では、私たちも行きますか」

「うん…」

俺たちは制服に着替えたあと家の前で別れた…

「おーはーよー和哉くん…従兄弟との同棲初日はどうだった?」

教室に着くと幼馴染の若葉ちゃん……………実は腐女子……………
……………俺を腐の道に落としたのはこの人……………

「同棲……………って相手は凄い美人だよ、俺が相手になるわけ
ないでしょ」

「わかんないわよ……………」

「同じ中学の可愛い銀髪の子と歩いてるのを見たよ…」

「それは興味深い…」

若葉ちゃんは目を光らせた

「今度、また詳しく聞かせてね」

若葉ちゃんは自分のクラスに帰るところを見ていた視線が減った
……まあ、凄い美人だしな……俺も幼馴染で無かったら彼女を
遠くから眺めているだけだっただろう………教
室が騒がしくなった。

「はよ……」

「おはよ……」

俺の隣の席に座ったのはこの1 - Aの……いや、この北陽中の王
子と言われてる七海^{ナナミ} 蒼^{ソウ}

「結城………休んだ時のノートを見せて」

女子が小声で俺を羨ましがっているよ……

「いいよ……」

七海は身体が弱くって休みがちであまり人と関わらない……

「しんどー」

この北陽中は金持ち校で有名な進学校に進学する人がほとんどだ……

………そんな中学校で病弱な身体で学年トップを維持するのは大変な努力が必要なのに七海は大したことないみたいに言う

「結城…読みづらい」

「ごめん…」

じゃあ、以外の人から借りればいい物をいつも俺なんだろう？………
…深い意味は無いと思うけど

「うん？」

「いや…熱がないかなって」

サラサラの髪が手に触れて気持ちいい

「へーき」

七海はサラサラの黒髪に碧眼と白い肌、整った顔の上に文武両道とくれば女子がまずほっとかない………病弱で掴みどころのない性格は男子に絶大な人気を誇る………って

「あれ？眼鏡…」

「最近、眼が悪くなって…」

ノンフレームの眼鏡が似合って羨ましい……俺はノンフレームは似合わないし、黒縁はオタクみたいになるし……俺みたいな平凡と違って七海や遥さんがすると一種のオシャレなんだよな

「あー終わった…」

「七海！放課後は一緒に本屋行かない？」

俺は机にグッタリとした七海に声をかけた

「今日は病院なんだよ…」

「じゃあ、一緒に病院まで行こうか？」

「……………」
「いいよ」

なんだろ、今の間は…

「さ、早くいこ…遅れると陽平さんがうるさい」

「あ、ああ」

俺たちは手早く帰り支度をした。

「じじってさ……七海の家近く?」

「うん」

電車を降りた先はなんと遥さんの家の近く…

「へえー俺も昨日からこの近くに住んでるんだ」

「ふうん あ、着いた」

俺は行こうとした七海の腕を掴んだ。

「明日から一緒に学校行かない？」

「いいけど…俺は休みがちだよ？」

「なら連絡先を交換しようか？」

「いいよ」

意外にもアッサリと携帯の番号を覚えてくれた…

「…」

「なに？」

「以外にアッサリと教えたなって」

「ふん？」

「…あ あと…さ」

「なに？」

「名前で呼んでいい？できれば俺も…」

七海の顔が一瞬曇った

「……………いいよ」

「ありがとう…蒼」

「和哉って変な奴…」

蒼は病院のほうに歩きだした…入口のほうに立っている白衣の男性は俺の顔を見て驚いていた……蒼はそいつに近づいて何かを話しかこんでる…白衣の男性は俺と蒼を交互に見て首を捻った………あの人が陽平さんかな？俺がお辞儀をすると相手も返してきた……俺はそれを見たあと遥さんの自宅に向かって歩いた……

「はあ…疲れた」

いや…引越しは荷物が少なかったから楽だったけど…

「でも…意外に仲良くなれたな…」

俺は小学の頃のクラスメイトに腐男子ってことがばれていじめに近い状況に陥ったところを助けてくれたのは蒼だった

『コイツホモだぜ』

『キモ…』

『七海もコイツに気をつけろよ』

『なんで?』

『だってコイツはホモだぜ』

『だから、なに?』

『え?』

『結城が誰を愛するかはアンタたちが決めることじゃないだろ』

『だって』

『これは結城が決めることだ…それに自分自身と違うから大人数で馬鹿にしているアンタたちのほうがキモいよ』

蒼のおかげでいじられることは無くなった…入学当初から蒼は人気者だったけど、誰とも仲良くならなかった…冷たい人と思っていた………アイツはクラスの誰よりも大人で周

りが子供すぎた。

「あー切ない」

それ以降、俺は蒼に恋心を抱いてしまった…

「マンガみたいにくましくないよな…」

相手はものすごい美少年で文武両道…俺は顔に学問、運動ともに平凡というまるで月とスッポンっという表現がピッタリと合うくらい釣り合わない…さらには同性って追い打ち付き…

「ははは…」

諦めきれない……相手が幾ら理解のある人とはいえ同性を好きになるかは別の話だ……だから友達として支えようと思う………報われないけど、せめて助けてくれたお礼がしたい………せめて幸せでいてほしい………恋人になれないなら友達でいたい

俺は重い足取りで遥さんの家に向かった。

【4】

「ふう」

生徒会室に入った私は思わずため息を漏らした。

「どうした？ため息なんかして…もしかして恋煩いか？」

「…」

「え〜と…遥さん？」

「
…」

「
マジ？」

「
…」

「
嘘だろ」

「
基本的に何も言ってますんがなにか？」

「
いや…元気ないなって」

「
そうですか？」

「いつも爽やかなお前がうなだれてるのは珍しいからさ悩み事か？」

「まあ…あなたにはわからない悩みですよ夏樹」

「どういう意味？」

この人は真田^{サナタ} 夏樹^{ナツキ}……………バイでかなりの遊び人……………まあ私
がいる限りそんなことは許しませんか…

「俺たちは親友だろ？教えてくれよ」

「私にとっては手のかかる子供でしかありませんが」

この人……………一応、生徒会の副会長……………目の届
く範囲にいと監視も楽なんですけど仕事をしないのでかなり困って
います。

「酷い……………中一のころからの付き合いじゃない」

「むしろ、中一のころからあなたの面倒を見た私の寛大さを評価してください」

「こっちのお世話してくれない？」

夏樹は私を押し倒した…

「季島先輩？」

私は夏樹の脇腹に蹴りを入れ怯んだ隙に足払いを仕掛けて倒した。

「やあ、小日向君……………どうかしましたか」

この子は小日向^{コヒナタ} 歩君^{アユム}、銀髪に緑の瞳が印象的な子……………とても小柄で可愛いために襲われることがある……………

「いえ…真田先輩……大丈夫なんですか？」

「ええ…私のいないところで夏樹に会ったら逃げてください」

「酷くない？」

「いえ……当然の配慮ですよ」

「それより…左条院先輩は…」

小日向君は入学当初…襲われそうになってそこを私の幼馴染に助けられて惚れたという…

「アユちゃんは健気だね…俺の好み……これからいいことしようか」

「いいことって」

私は夏樹を思いつ切り蹴った…

「痛い！本気で蹴ることないでしょ……」

「次はこの程度で済まさないよ」

「うめんなさい」

はあ…昶といいどうして私の周りはいくつものが多いんだろ……

………サジョウイン アキラ左条院 昶確かにイケメンだけど………

………俺様のワガママ野郎で小学の時から喧嘩はするし、寄つて来た女に暴言を吐いて泣かせたり、お金持ちの威光を媚びようとした教師を潰すはとんでもないやつでそんなやつがいじめ撲滅に動いているとは驚きの一言です………聞いた話だと…昔、

好きな人が苛められて怪我したと、それ以降からいじめを無くして

いると………そんなに昶が溺愛する人とはどんな人な
んでしょうか？きつと素晴らしい方なんでしょう………あの
手の着けようのない悪魔を人として更生させ、さらには慈善活動を

「おい…聞こえてるぞ」

昶が生徒会室に来たってことは…

「あら…昶、来てたんですか？」

「ああ…お前に少し用事あるんだ」

「用事？」

はあ…“またか”

「ああ、さっき1年が襲われてたから少し…」

「昶の少しはかなり酷いことになっているな……」

「……………はあ、騒ぎになる前に收拾をつけに行きますよ」

私は携帯でほかの生徒会役員に指示を出した。

「小日向君は昶がこれ以上騒ぎを起こさないようにしっかりと見張ってくださいね」

「は、はい」

「……チッ」

私はサボろうとした夏樹を無理矢理連れて現場に向かった。

「……ただいま」

あの後……先生に説明して、事件を起こした人たちから事情を聞いて嚴重注意でなんとかことを片付けた……早く兄さんと和哉君のご飯を作らないと……待つてるだろうな……もう7時か……兄さんは今日は早く帰ってくるからもういるかな？

「……遥さん？」

「遥……遅いぞ、もう少しで先に食べる所だったぞ」

出前でも取ったのしょうか？

「しかし……カズ坊もなかなかの料理の腕してるな……」

へ？

「遙さんも…………冷めてしまつ前に早く食べてください」

私がリビングに着くとそこには明らかに手作りのご飯が並べられていた…

「これはもしかして和哉くんが？」

「……………うん…………朝はひとりで作らせてしまったから」

私が尋ねると和哉君は照れながら答えた……………その様子はまるで大型犬が喜んでるみたいで可愛い……………180
？の人に可愛いなんて思う私は相当な変わり者ですね

「別に気にしなくてもいいのに………ですが、折角和哉君が作ってくれたので冷めないうちにいただきますか」

私は自分の部屋に戻り私服に着替えてリビングに戻った…

「……………ところでカズ坊は好きな人はいるのかな？」

私と和哉君は思わず噴き出した

「ホラ…お兄さんたちに教えなさい」

「……………いないよ」

なぜか落ち込んでいるけど……………どうしたんだろう？

「お、俺……………食器を洗いますね」

「ええ」

「おう」

和哉君は落ち込んだまま台所に向かった…なんか居づらくなった私は風呂に入ることにした………その様子を兄さんが面白そうに見ているのを気づかなかった………

「ふう〜」

風呂から上がりミネラルウォーターを取った。

「あ…」

和哉君はリビングでテレビもつけずにうなだれてた。

「どうかしましたか？悩みなら聞きますよ」

「でも…」

「話せる分だけでいいですよ…」

和哉君は戸惑いながらも少しずつ話してくれた。

「……………つまり、苛められてる時に助けくれた人を好きになってしまったと……………」

「……………うん」

はあ…私は失恋か

「なんでアタックしないんですか?」

「……………相手は凄いい少年で文武両道だよ…俺は何の魅力も無いし」

「……………そんなことはないですよ…」

あきらめるな…って言えなかった……………

……………

「ありがとう……………相談にのってくれて…少し落ち着いた」

顔が無理をしていて嘘だとわかった。

「……………もう寝ましょう…明日も学校がありますしね」

「はい…」

私は和哉君が寢室に上るのを確認して自分も寢室に上った

【5】

あれから月日は経ち…中学初めての夏休みが終わった…俺たちは久々に休みを取ってくれた両親とハワイの海を楽しんだ…
………遙さんはいく先々でナンパされていたけど…この時だけは
この平凡な顔で良かったなあ…思った…

「なるほど………和哉君は私に内緒でそんな腐のイベントを楽しんだわけね…」

学校に来て若菜ちゃんにすっかり旅行のことを話してしまって問い詰められた。

「いや…」

「もちろん…お土産は？」

「……………お菓子です…」

「一度…殺り合おうか？」

「だって…海だよ？カメラや携帯は壊れちゃうよ……………うわぁ！？」

若菜ちゃんに命乞いをしてると背中に何かもたれ掛かった…

「……………はよ、和哉」

蒼の眠そうな声が聞こえた。

「おはよ……どうした？凄い眠そうだけど…」

「……………別に……………」

いや、眠そうと言うよりは…

「蒼？もしかして疲れてる？保健室に行くか」

「いい…」

俺はソウの額に手を当てた…

熱はない…どうしたのдаро？

「シュウ…」

痛々しいくらい辛そうな顔をして呟いた蒼は死にそうなくらい弱
てる…

「和哉……1時間目はなに？」

……俺は蒼になにを言っても無駄と理解した俺は言い方
を変えた…

「俺さ、保健の先生に資料を取りに来るように言われたんだ…一緒
に行こうよ」

「いいよ…行こう」

「若菜ちゃん？そう」

俺が蒼と保健室に向かうとしてら若菜ちゃんは…

「私も一緒に行つていい？」

目が怖い…断つたらどうなるか…

「いいよ…蒼もいいよね」

「ああ…」

こうして俺は三人で保健室に向かった。

蒼は何かを考えながら歩いているらしくうつむいたままだ…俺と若菜ちゃんはその後ろを歩いた。

「和哉くん？いつの間に七海くんと仲良くなったの？」

若菜ちゃんは蒼に聞き取れないくらいの声で聞いてきた

「うん……席も家も近いから仲良くなったんだよ」

「ふーん？……知らないんだ」

「何が？」

若菜ちゃんはいつも見ている少女雑誌を俺に渡した。

「なにこれ？てかなんで鞆を持つてんの？」

「教室に行きそびれたからよ…それはいいから見て」

俺は意味が解らずに雑誌を開いた。

「別になんともないけど？」

「そろそろよ」

俺は次のページはアイドルの特集で可愛い人からかつこいい人までいる…その中でも飛び抜けてる双子の兄弟がいる…片方はみたことないけど片方は見たことある……………というよりは

「蒼？」

「そうだよ」

「もしかして…」

隣の人…

「おい…着いたぞ」

いきなり呼ばれて内心はかなり驚いたがなんとか平常心を保った。

「じゃあ…入ろうか？」

俺たちは保健室に入った…

「出張って書かれてるけど？」

「うん…嘘だしね、それより夏休みになんかあった？」

逃げられないって悟ったのか諦めが含まれたため息を蒼はついた。

「……………お父さんが死んだんだよ」

「え？」

「だからお父さんが死んで葬儀とかで忙しかったんだよ」

蒼は面倒そうに髪を掻きながら言った。

「ゴメンね…いくらなんでも無神経だよね」

「別に…生きていてもほとんど家にいないし、ずいぶん前から独り暮らし見たいになっていたからなんともないけど…」

身体が弱いのに独りで暮らしてるとなると大変だろうな……

「あの…」

「わかったから疲れてるだろ…寝てろよ」

俺は渋る蒼を無理矢理、ベットに寝かし付けた……

「先生には言っておくわ…またね」

若菜ちゃんは先に教室に戻った。

「和哉？」

「あのさ…蒼？」

俺は蒼の頭を撫でた…漆黒の髪がサラサラとして気持ちいい…

「……………今日、家に来ていい？」

「……………はあ、別にいいけど？何も無いよ」

「じゃあ、寝てろよ…」

蒼はゆっくりと目を閉じた。

もう一時間くらいたった…少し顔色が良くなって規則正しい寝息をたてて眠っている…白い肌に整った顔立ちに柔らかそうな唇…俺はそれを指なぞる……………まるでスポンジをさわっているみたいに柔らかい…………俺はその唇に自分の唇を合わせた……………触れるだけでなのに凄く気持ちいい……………

「ほわぁ……………」

変な叫び声をあげてしまった

「うん……………シュウ……………」

よかった起きなくて……………」

「ふう……………」

シュウて誰だろう？

俺は蒼の細い手を握った…

「……………蒼……………愛してる

誰よりも愛してる……………」

俺と蒼しかいない保健室で愛を告げた……………寝ている蒼に静かに

【6】

閑静な住宅街にある政治家や弁護士……上級家庭が主に居を構える一等地……

「へえ……七海くんって良いところに住んでるね？」

………昼休みに若菜ちゃんに蒼のことを根掘り葉掘り聞き出され着いていくと言われ脅され……

「………そうか？」

「七海くんの親って何してるの？」

「………母親が弁護士に父親が一流企業……結崎のイギリス支部のソフトウェア開発の部長………だった」

結崎………って日本を代表する財閥の1つじゃないか………あれ？………だった？………あ

「……………七海くんの母親って呉羽女史？」

呉羽女史って……あの成田事件の冤罪を証明して真犯人を突き止めた天才弁護士じゃないか……………でも確か……

「ああ……」

確か何年前に火事で亡くなったはずだよなあ……………

「……………着いたぞ」

でかいな……………結構……でかい……

「入っていいぞ……」

蒼は鍵を外すと俺たちを招き入れた……………中は綺麗に掃除されている。

「まあ……………粗末な所だけどくつろいでよ」

粗末……………ってホコリ1つないし……檸檬の爽やかな香りが青を中心とした家具に合っていてかなり過ごしやすい空間になっている……………とても同じ中1の独り暮らしだと思えない……………

「あはは…あまり気を使わないでよ、七海くん……って名字呼びじゃあ気を使うか……蒼くんって呼んでいい？」

「ああ…構わないぞ、相楽さん」

「ありがとう！私も和哉くんみたいに呼んでよね！」

若菜ちゃんは笑顔で蒼は相も変わらず無表情で話している……絶世の美少年に美少女……絵になる……若菜ちゃんが腐女子で蒼が無表情じゃなければ下世話な心配をするんだろ……

「蒼くんって……腐に興味ある？」

ちよっ！ノーマルな人間に唐突に何を…

「腐……って？」

「なんでも……………ぐはあ？」

「BLや薔薇本とか同性愛とか近親相姦とか？」

いきなり脇腹にストレートを喰らったよ……………若菜ちゃんには色んな意味で勝てないな……………マジで

「……………近親相姦……………」

近親相姦って言った時……………蒼の眼が揺らいだ気がした……………多分……………

「興味ある？」

「……………嫌いだけど否定はしない……………」

ザクツと何かに削られた気がした……………

「……………大丈夫！真の腐女子、腐男子足るもの妄想と現実を使い分けなくてどうします？……………腐に生きるものなら迷惑ならぬ程度の傍観しかないよ……………相手もプライベート……………見られたくないこともあるし……………相手も人間で真剣なふたりを見世物にしたりしな

いわよ……ちゃんと分別は分けるつもりよ……」

真の腐女子、腐男子ってなんだろう？

「……………分かってるならいい」

確かに相手の気持ちを考えない傍観は良くないよね……………蒼と若菜ちゃんは大人だな…

「……………確かに平凡×美少年（和哉くん×蒼くん）見れないのは残念だけど……」

だからノーマルな人間に何を……………なに？平凡×美少年……………って誰？

「いやいや……………美少年×平凡（蒼くん×和哉くん）かな？」

「いやいや……………CPはどこから？」

「現実的にそんなに簡単に美少年なんていないだろ……………でちなみにCPってなんだ？」

「もちろん……手短な友達から……CPは攻め受けのこと……
突っ込む人と突っ込……」

「じ・ちょ・うして若菜ちゃん！蒼はノーマル！」

「えゝ？」

「ノーマル……なのか？」

「「え？」」

蒼ってもしかして……若菜ちゃんの方を視線を送ると視線が合った
……同じ考えみたい……

「……蒼くんは好きな人……いる？」

蒼の表情が凍った……いや……変化した……無表情から動揺と絶
望が一瞬だけ顔に出たあとに無理矢理に無表情な顔を取り繕った……
……という感じだ……

「……居たよ」

「……………なんかごめんね変なことを聞いて…」

元気な若菜ちゃんも気まずそうに謝った……………俺はなんとかフオロ
ーをしようとするで見事に腹がなった。

「……………和哉くんも自重してね」

「……………どんなタイミングだよ」

かぁーと赤くなる顔をテーブルに押し付けていると蒼は台所を漁っ
ていた。

「まだ夕飯には早いな…何か御菓子でも食つか？」

「和哉くんは蒼くんをた

「だから…自重してよ若菜ちゃん！」

「やだ！」

「やだ……………じゃない……………蒼、御菓子ってポテチ？」

冷蔵庫を漁りながら蒼は答えた。

「クッキーの生地があるからそれを焼こうかなと…」

「クッキー！？しかも手作り！？」

「あ！若菜ちゃんも一応は普通の女の子みたいに甘いものが好きなのか…」

「……………一応ってどういう意味？どういう？ね……………和哉くん？」

ヒイ若菜ちゃんの後ろに閻魔様が…

「…なんでもないよ？」

「……………まあ…今日は素敵な萌をくれたから許すが今度からは……………どうしようかな？」

「あはは…そんなことより蒼って料理得意なんだ？」

「いつも両親居ないから自然に……………」

「俺も幼い頃から両親が滅多に家に居ないんだ…」

「ふ〜ん」

「親が居ないほうが自由に出来ていいって言うのが一般論だけど………実際はどう?..」

若菜ちゃんって意外に鋭かったり鈍かったり純粹だったり腹黒だったり……

「寂しいけど………自分でなんでも出来るからいい勉強になるよ……」

「まあ………普段からほったらかしいる両親が無理に家に居るくらいなら居ないほうが気軽だな……」

蒼ってあんまり家族のこと………好きじゃない………よな?

「ふ〜ん………私の家庭は古臭いから女は家で家事………だから、母さんがいつも家にいるけど………人による………のかな?..」

「そうかもな……俺の親はほったらかしにしているのに成績やらなんやらうるさいからな……好きではないな……」

「俺の両親はかなりの放任主義だよ……可愛い子には旅をさせろって理論らしいけど……呆れた叔母さんが自分の息子と一緒に暮らせて言ってくれたけど……」

色んな家庭があるんだね……

「ふうん……つまり今はその人たちと暮らしてるんだ？」

蒼はアイスティーを注いでくれた……

「ありがとう……そうだよ……ふたり兄弟でお兄さんのほうは格好いいし弟のほうは蒼みたいに綺麗だし」

「ちょうど喉が乾いてたのよ……って蒼くんは兄弟いる？」

「……いや……」

何だろう今の間は……

「アールグレイの香りかいいい香り……紅茶の淹れ方上手いね蒼くん……今度淹れ方を教えてね？」

「………ってことはまた来るのか？」

だから何だろう………今の間は？

「もちろんよ」

「………はぁ………焼けたよ」

ため息をついてからクッキーを持ってきてくれた……種類はジンジャーにくるみにチーズにチョコにバニラと意外に種類は豊富だ……

「……ゲームでもするか？」

「ボーイズラブなら」

だから若菜ちゃんは自重…

「残念なならない」

蒼はクールすぎ！

「ならば奥の手……………無理矢理くっ付ける…」

ならばじゃない

「格ゲーならあるぞ？」

なんで蒼はそんなにクールなんだよ

「分かってるじゃないか！蒼くん」

こんな感じでゲームスタート！

「っ…強い！…でも負けない！」

蒼と対戦中……………意外に強い！！

「はあはあ……………やっぱり美少年×平凡（蒼くん×和哉くん）かな
?!

「だから…………

「あ…

俺が目離れた一瞬の隙に蒼のキャラの必殺技が発動した…………

『舞い上がれ』

必殺技の決め台詞ともに必殺技が炸裂！！

『私の心は決して折れません』

必殺技が決め手となり俺の負け……

「若菜ちゃんのバカ！」

「イチヤイチヤした和哉くんが悪い」

イチヤイチヤしてない……

「……………集中力ない和哉が悪い」

勝手にCPを決められているのに集中力のくそもあるか!!

「蒼くん!!オタクの得意分野で和哉くんを葬ったことは誉めよう………だか和哉くんをこの道に堕としたこの私は一筋縄ではいかないよ!!」

自覚はあるんだね……若菜ちゃん

勝負は拮抗……… 一步譲らない接戦となっています…俺は蒼の部屋にある写真が気になった……

「誰だろ……… 蒼に似た顔の人が並んで写っている………」

茶色がかかった黒髪に淡い茶色の瞳…蒼より少ししっかりした体型………そして蒼と同じ顔

「なんだと？まさかの近親相姦!？」

「あ…

『喰らいやがれ』

例によって必殺技の決め台詞ともに必殺技が炸裂………

「若菜ちゃん？負けてるよ?。」

「蒼くん似て格好いいじゃないか……兄弟？」

若菜ちゃんが腐女子の眼になっている

『燃えただろ』

うん…燃えてますね

「ああ…」

若菜ちゃんが詳しく聞こうとした瞬間に若菜ちゃんのお腹が鳴った

……

「……………付き合っているの？君たちは…」

「「ないない」」

「……………まあいい…ご飯を作るな」

若菜ちゃんは大画面のテレビをニュースに切り替えた……

「手伝うよ…蒼」

「休んでいても良かったのに…」

「さすがに邪魔してるし…」

「ふん」

相変わらず反応が薄い…

「ところで…」

「？」

「若菜が凄い気持ち悪い顔してるけど…」

ドストレート！？毒舌！？さすがに若菜ちゃんも傷付くよ……

「ゴメンゴメン……お邪魔みただし帰るね？………」

ほら……

「和哉くん」

「なに？」

若菜ちゃんは俺に耳打ちをしてきた。

「ローション渡しとくから使い心地を明日、報告してね？……情事もね！」

「ありがとう………っていきなりなにを言い出すんだよ！……使わないからね………あと情事もしないから」

「………落ち込む所かテンション上げてきたよ………何故だろう………蒼との距離が広がった気がする………心の………」

「どっちが受けかな？どっちもネコっぱいけど………」

「だから………蒼はノ・ン・ケだって無理矢理こっちの道に………もしかしてこっちの道に蒼を引きずり込むために今日着いてきたの？」

若菜ちゃんの眼がギランと光った気がする……

「……………まさか！」

「まあいい……………けど…俺たちは情事を交わさないからね……………」

「おい……………」

「なに？蒼」

「出来たぞ」

「はやッ……………いつの間に？」

「いつの間に……………ってお前ら30分くらい口論してる間に……………」

……………って俺たち30分も話してたの？確かに出来上がるはずだよ……………

「……………さっさと食べるぞ？」

「お粗末様です」

「美味しかったね……蒼くんは将来いい受けになるよ」

「受け？」

俺は流石に疲れた……蒼はクールだし……若菜ちゃんは蒼をこっちの道に陥れようと必死だし……

「流石に明日も学校が帰るか？」

「ええ……またね、蒼くん」

「蒼……また明日」

「ああ……」

蒼が少し笑った気がした……変化はゆっくりと確実に起きていた……
……良くも悪くも……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4043q/>

sweet・brown

2011年10月8日11時53分発行